

「名東図書館どくしょ会」 第5回 結果レポート

平成26年8月30日（土）10：30－12：00 名東図書館集会室

参加者 7名（一般）

進行 1名（名東図書館）

テーマ本 『金閣寺』 三島由紀夫/著

《あらすじ》

貧しい寺に生まれた吃音の孤独な青年溝口は、父親から金閣寺の美しさを教えられ、金閣寺に特別な思いを抱く。中学で金閣寺に修行僧として入り、そこで明るく幸せそうに見える鶴川少年とであう。が高校にはいると、賢く芸術的でかつ暗いイメージの足の悪い青年柏木にであい影響をうける。一方、女性との場面で金閣寺の幻影におされ、目的がとげられない。金閣寺の老師との確執、敗戦などがないまぜになり、金閣寺を焼いて自死しようと決心し、実行する。が、燃え盛る金閣寺を見て、韋駄天のこどく逃げ「生きよう」と思う。

司：では、お一人ずつ、お名前とちょっとした感想、テーマ本を5点満点で点数づけして述べてください。

か：暗いと思った。が、途中から作品が建築物のようにできていると思ったら、スラスラ読めだした。最後はキラキラ輝き、暗さがウソのようになくなり、三島スゴイ！とおもった。どこまでが創作で、どこまでが事実に基づくのか知りたい。 5点。

み：三島については、割腹自殺のことしか知らない。本も読んだことはなかった。むつかしくてイライラ（笑い）。でも、31歳でこれを書いたと思うと、三島はすごいとおもった。ハナシは特殊な世界な若者のことだが、この世界、すごい！ 4点。

松：高校か大学で読んだが、記憶にない。市川雷蔵の映画でみて、強烈な印象がある。「潮騒」「午後の曳航」を読んだ。いいなア。年齢的にも30代だったのでピッタリだった。読み始めたら難解、比喩も難しい、こういうのが文学かと思った。平野啓一郎や中村航をよんでいるが、こういうのを読まないと言書とはいえないと思った。「生きよう」と決心するところで終わるのがすごい。三島が自殺せず生き続けたら、どんなにすごいものを書いたのかと思う。いい体験でした。5点。

い：年齢で感動する本が違う。30代で読むとよかったかな。今、60歳をすぎているので今読むと、なかなか読めない（笑い）。建築物としての構成がしっかりしている。観念的な哲学的な小説。なにかをたくらんで書いている（笑い）。一回読んだだけではわからないよ。人間がキャラクターとしてみえない。人間がかけていない。とくに、女性を道具として扱っているのは、そうとしか見えないのだろう。小説として肉付けがないと思った。3点。

本：実は、太宰のつぎに三島が好き！やっぱり、三島は好き！こういう人が好きです。ふたりには流れているものが同じ。主人公の肉付けがないが、そういうのが好きです。切腹する人だなと思った。ふつうの世界では生きていけない人、二人とも、よく似ている。5点

真：読んだことなかった。伯母がファンで前から目には入ってたが、まじめに読んだのは初めて。人間をかわいてないし、感情移入できる人物がいない。どの人も嫌い。主人公がなぜ柏木にひかれるのかわからない。母も父もふつうなのに卑下されて育ったわけではないのに、どうして、こんな人間になったのか、わからない。ただ、人間を客観的にみる力はすごいと思った。作中人物から距離をとっている。こういう書き方をする作家をほかに知らない。が、主人公に共感できない。5点。

加：三島は初めて。難しい。今日のために読んだ。本はいいなあ（笑い）坊さんが遊郭にいくというニュースなんか聞くと、仏教界もすごいなあと思う。いろいろ考えさせられました。3点。

い：よくかけているけど、私はいいです（笑い）。私から、すっごく遠い作品。でも、面白いから「潮騒」「仮面の告白」と続けて読んだ。よくかけてるけど、まあ、いいかな… 私小説っぽい作品だと思います。その意味で太宰と同じ。3点。

司：読むのが難しかったけようですけど、皆さんの点数は高いですね。5点の人が多い。

○：日本人のセンチメンタリズムにはあわないな。

○：「金閣寺」は海外で人気があるようです。まあ、日本的な文学としてかな。

○：海外の人ほうが、理解しやすいと思う。建築物的なかきかた。情緒的ではない。

○：言葉として自然の描写は素晴らしいと思う。

○：でも、日本人の感覚とは違う。作者がみえないし、人間がかかれていない。

○：かかれてますよ、柏木はこういう人、鶴川はこういう人、って感じに…

○：でも、それぞれ、役割をになっているだけで、生きている感じがしないです。

○：なるほど。

○：どうして、老師を殺さずに金閣寺を焼いたのか、自分は死なず、他人を殺した秋葉原の

無差別殺人ににているかなあと。

○：象徴としての金閣をなくす、ということだと思う。人間は象徴になれない、老師のあとには、代わりの老師が必ず現れる。無にしてもあとがある。金閣はそれしかない。

○：最初、主人公の金閣への気持ちは軽いですね。私も、実物見たとき、えっと思ったくらい、軽かった（笑い）。

○：金閣を自分と同一化していて、戦争で自分も金閣も滅びずに残ってしまったのが、耐えられないのではないか。なくなると思っていたのだ。

○：金閣でなくともよかったのかな。美しいものなら、なんでも、その辺のお寺でも。（笑い）

○：そんなことはない。三島はこの事件に触発されて書いたのだと思う。受けも狙っていた。三島は、社会的な事件をもとに小説をかくことをしている。目立ちたがり屋だし、金閣のこの事件で、小説を書きたかったのだと思う。

○：太宰と三島は仲が悪かった。先にデビューしていた太宰に三島が会いに行って、その時のことでいっぱい悪口をかいたら、太宰は「三島はほんとは僕のことを好きなんじゃないのか」と言ったとか。だから、よけいに三島は太宰を嫌っていたようだ。こっちからみれば、おんなじに見えるけど。（笑い）

○：ふたりとも、私小説っぽいと思う。金閣寺も登場人物の誰にというわけではないけど、三島の自己が投影されていると思う。

○：小説って、みんなそうでしょ。（笑い）

○：女の人の描き方が、ひどい。女が嫌いということが、よくわかる。男色だったたらしいけど。将校の女の方は、すごくきれいに描かれていて、最後の逢瀬で自分の乳汁をお薄ちゃわんに入れて、将校に飲ませるシーンはすごく綺麗で印象的なんだけど、実はその女の方は、生花の師匠で柏木と関係もあって、柏木に冷たくされて取り乱す。そこは、ひどい。よくもまあ、こんなにおろかな女を描いたもんだと…

○：三島は同性愛系というが、結婚もしているし、子もいるはずだ。社会的にはきちんとしている。

○：同性愛はポーズだという人もいる。わからないなあ。だが、女のひとのことは嫌いだね。

ふつうの女の人を描けない作家だな。

○：おばあさん子で、貴族趣味。こどものころから、歌舞伎とかお能とか見ていたようだ。3代そろって、東大法学部卒、お金持ち、裕福、だが、おじいさんは農民出身で、平民階級だった。でも、学習院へはいるんだよね。

司：柏木はどうでしょう？

○：ワルです。やってられない。尺八も吹くし、お花の心得もある。芸術家タイプ。頭のいい人間だが、ワルいねえ、やってられない。女たらし。（笑い）

○：足が悪いことを逆にとって、女の人をだまして、同情をさそう。その手口のずるさ。

○：わざと、溝のふちを歩いて、ころぶ練習をしていたなんて、ぞっとする。そうやって、目をつけた女をだまして、ついていって、ものにする。その悪事に主人公まで、まきこむ。どういう人間だとおもった。

○：下宿の娘は、柏木の足を悪く言うけどそのあとで柏木の「目がきれい」とも言う。それで、主人公はショックをうけるのでは。柏木は「ふつうのところ」でも女にもてていると気づいて、自分をみて絶望するのではないか。

○：そうかなあ、柏木が一般の人間のところに“降りてきた”わけで、もう、足の悪いことを武器にはできないことをいいかかったのではないか。

司：鶴川はどうですか？

○：鶴川は、唯一、そこいらにいそうな感じの人間。明るくて、幸せで。ふつう。

○：でも、暗いものを持っていたんですね。それだから、ダークな柏木にも親近感を覚えて近づいたんだと思う。

○：鶴川は、いいやつです。恋愛で自殺するなんて、人間臭い。感情移入できる。柏木の悪さに気がついていて、主人公に柏木に近づくなといったと思う。

○：違うと思う。嫉妬、嫉妬です。主人公と柏木が仲良くしているのを見て、嫉妬した。主人公を自分のものにしておきたいという思いでしょう。

○：3人の三角関係はありますね。同性愛的な。においます。鶴川の白いシャツとか。

○：柏木が3年間ものあいだ、鶴川の手紙を主人公に隠していたのがわからない。何をおもっていたのか、主人公へ優越感をもちたかったのか。

○：柏木は、死ぬ前だけじゃなくて、ちょくちょく鶴川に手紙を書いていたんじゃないのかな。むしろ、鶴川をあおっていたとか…

○：3年間隠していたのは、ちょうどいいタイミングを見計らっていたと思う。効果的に渡せるカードとして持ち込んでいた。下劣なヤツだ。

○：柏木は高尚なところもある。鶴川はそこに引き付けられたと思う。手紙の件も高尚さゆえのことではないか。

○：高尚だが、人間としていやしいと思う。

○：柏木は金閣を焼くことに気づいていたと思う。頭いいから。

司：老師はいかがですか？

○：やなヤツ。魅力なし。（笑い）

○：老師が、女と逢引しているのに出くわすとき、犬が導くかたちなんですよ。主人公が犬を追いかけていくと、その場面にでくわしてしまう。ここが、おかしかった。なぜ、犬？必然性なし。

○：私は、犬がでてきてほっとした。視覚的、映像として面白いと思った。演劇的というか。

○：そうですね。老師と関係をもちたいと思っても、ちっともつながらない。大声でどなってしかってほしいと主人公は思うよね、でも、老師は無視。だから、主人公はしかける。米兵の女の腹を踏んでいないとみえすいた嘘をついたり、老師の女の顔写真をわざと新聞にはさんで老師に届けたりする。けれど、ちっとも、老師はほとんど無視する。会話がな。い。だから、よけいに、老師を嫌いになり、下げずむ。

○：でも、老師は、大人としてすごくフツーですよ。どこにでもいそうな、特別ヘンではない。

○：老師が父親的にふるまえば、よかったかな。金閣寺を焼くこともなかったかな。誰にも、気かけられない人間というのは、つらいものです。

○：最後に、もう一人老僧がでてくるね。あの人はいい。おそい！よね（笑い）。もっと、はやくでてこい！

○：仏教界のストレスもあったのではないのでしょうか。厳しいとか、年齢の割にはストイックでなくちゃならないとか。

○：ぜんぜん。とても、楽そうに描いてある。厳しい修行をするわけでもないし、すごく禁欲的でもないし、貧しいのはその時代はみんなそうだろうし…

司：有為子はどうですか？

○：最初の女性にふられたことが、ずっと、コンプレックスになっていますね。

○：ふられるなんて、そんな関係ではないですよ。たんに、待ち伏せして出くわした、そして吃音だから、うまくものが言えない。で、馬鹿にされる。それだけ。でも、最後の最後まで、有為子の幻影がでてくるね。よっぽど、ショックだったのか。

○：名前もすごい。有為子なんて、よく考えつくね。最後の娼婦のまり子という名前もすごいと思う。

○：吃音というコミュニケーションの道具が絶たれていることは、本人にとっては、すごくつらいことだと思う。

○：そんななかで、柏木とだけ、コミュニケーションがとれたんですね。これは、主人公にとって大きなことから、柏木からものすごく影響を受けた。

○：ふつうの人は吃音の人としゃべることがむづかしい。鶴川は「気にならない」という。いいやつです。でも、主人公は、気にする。やっぱり、明るい幸せな鶴川には完全には心をひらけない。で、柏木とだけ、“友達” になれたんですね。

司：ありがとうございました。言い尽くせないことかもしれませんが、ここで、時間です。このあと、名東区政40周年を記念して、皆さんで写真をとりたいのですが、OKの方は、こちらへどうぞ。

と、写真を取り、次回のことをきめてお開きとなりました。

次回	12月20日（土）10：30～
テーマ本	「アルケミスト」 パウロ・コエーリョ/作